

『小涅槃經』の成立背景

——宗祐寺所藏仏涅槃圖を手がかりとして——

岸 田 悠 里

一 問題の所在

釈迦涅槃の物語を伝える偽経の中に、『小涅槃經』というものがあつた。『小涅槃經』は、「般涅槃を得た釈迦が、生母摩訶摩耶の嘆願により、棺から出て偈を説く」という所謂「金棺出現」の物語を中心的な内容とするが、訳者や成立年といった情報は未詳であり、これまでほとんどその存在は知られていなかった。

本稿では『小涅槃經』の存在とその成立背景を論じる。主に奈良・宗祐寺所藏仏涅槃圖左幅賛に注目し、それが『小涅槃經』に依拠することを指摘することで、本經成立の下限が一二世紀末から一三世紀初め頃であることを明らかにし、さらにその成立背景を考察したい。

二 『小涅槃經』とは

(一) 金棺出現

まず、『小涅槃經』の中心的内容である「金棺出現」について述べておこう。この物語は、南齊(四七九～五〇二)の曇景(生没年未詳)訳『摩訶摩耶經』(以下、『摩耶經』)卷下に初めて確認できる。『摩耶經』卷下には、「釈迦が大神力によって、自ら棺の蓋を開けて出て、摩耶夫人に偈を説く」ことが記されている。

この「金棺出現」の物語を保持する文献は、

A 『摩耶經』の所説を直接または趣意で引用する文献

B 『摩耶經』をもとに作られた『仏母經』等の經典

という二系統に大きく分けられる。本稿では主にB系統に注目する。B系統の『仏母經』は『摩耶經』卷下から「金棺出現」の物語を抽出して作られた經典であり、とくに八世紀半ばから十世紀頃の敦煌で流行したと考えられる。

実は、このB系統の『仏母経』とこれから述べる『小涅槃経』はほぼ同内容であり、同系統に属すると考えて良い。

(二) 『小涅槃経』テキストの問題

中国の文献資料上からは、三点の『小涅槃経』テキストが確認出来る。⁽¹⁾

(1) 国立バイエルン図書館所蔵写本(元々明初)

(2) 中国国家図書館所蔵版本(元)

(3) 佚名『諸経日誦』収録文(明頃?)

上記三点はいずれも元代から明代のものであり、これらの年代は一四世紀を遡らないであろう。では、『小涅槃経』の成立も一四世紀頃であろうか。実は、さらに古いテキストが存在する。すなわち、奈良・宗祐寺所蔵の仏涅槃図(平安末「二二世紀末」から鎌倉前期「二三世紀初め」頃の作。以下、宗祐寺涅槃図)の賛文である。

宗祐寺涅槃図は左・右・中央という全三幅で構成される。左右両幅にはそれぞれ賛が記されており、とくに左幅賛には「事ハ在二リ小涅槃経一」という記述が確認できる。

宗祐寺涅槃図に関する専論としては、中野「一九七九」が挙げられる。⁽²⁾ 中野氏は、この左幅賛について、内容から『仏母経』との関連を指摘し、両者を比較した。その結果、『仏母経』と賛が逐語的に一致しないのは、『仏母経』系の他の經典に依拠したか、賛にする場合に改めたのかも知れないと述べ

『小涅槃経』の成立背景(岸田)

ている(中野「一九七九」八四―八八頁)。中野氏は、本賛を『小涅槃経』に依拠するものであるとしながら、具体的な文献を提示していない。

ところが、この左幅賛と『小涅槃経』の経文を対照させた結果、多少の省略や文字の異同は見られるものの、ほぼ一致することが明らかになった。次に対照表を示す。

『小涅槃経』

爾時如来、倚臥双林、告諸大衆、吾今背痛欲入涅槃。(中略)告弟子優波離、汝往升天、報母令知。爾時摩耶夫人、在忉利天上、受諸快樂。忽於昨夜子時、得六種惡夢。(中略)說夢未訖、乃見報人優波離從空而來。爾時摩耶夫人問言、尊者。尊者。因何形容憔悴、面無精光、唇口乾燥、全無威德、不比尋常。爾時優波離、哽咽報言、仏母。三界大師、忽於昨夜子時、入般涅槃。金棺銀槨殯殮已訖、故遣弟子、報

宗祐寺涅槃図左幅賛

如来仰臥双林告諸大衆吾今
[置]痛欲入涅槃告弟子／優婆
離汝昇天報吾母令知……摩
耶夫人在忉利天忽作夜／子時
得六種惡夢說夢未訖乃見報人
優婆離夫人問言聖人々々／何
因形容憔悴面無精光唇口乾
燥全無威德不並尋常優婆離
哽咽報言仏母々々三界大師
忽於昨夜子時入般涅槃故遣
／我来報母令知夫人聞說此
語悶絕躄地諸天姝女冷水灑
面／良久方蘓即將徒衆鬘鬘
飛至双林所夫人大衆……／

『小涅槃經』の成立背景(岸田)

母令知。爾時摩耶夫人、聞說此語、悶絕躄地、猶如死人。諸天彩女、冷水灑面。良久乃甦、即將徒衆、鬖鬖雲飛、至双林所。(中略)如來。如來。吾是汝母、汝是吾子。今既捨吾入般涅槃。(後略)

……吾是汝母汝是吾子今既捨我入般涅槃(事在小涅槃經：能繁録之矣)

(中野「一九七九」参考)

(中野氏の読みと異なる字は太字で、判読不能な字は…で示した。また改行は/で示した。いずれも筆者による)

表から、左幅賛の大部分が『小涅槃經』本文と逐語的に一致していることがわかる。よって左幅賛が依拠したのは、中野氏が想定した「仏母經系の偽經」ではなく、実際に一四世紀には存在していた『小涅槃經』の本文そのものと見るべきであろう。そうすると、この賛は『小涅槃經』の最も古いテキストになるため、本經の成立年代は一二世紀末から一三世紀初頭以前と考えて差し支えない。

三 『小涅槃經』の成立背景

最後に、『小涅槃經』の成立背景について、先行する『仏母經』と比較することで考察していく。

『仏母經』と『小涅槃經』の本文を比較してみると、『小涅槃經』は『仏母經』から經文を収集したような内容となって

いる。しかしながら、『仏母經』と『小涅槃經』では次の点で大きく異なっている。

・『小涅槃經』には、「諸行ハ無常ニシテ、是レ生滅ノ法ナリ。生滅ハ滅シ已リテ、寂滅ヲ為ス樂ト」と「如來ハ証ニシテ涅槃ヲ、永ニ斷ニ於生死ヲ。若シ能ク志心モテ聽カハ、常ニ得ニ無量ノ樂ヲ」という『大般涅槃經』所説の偈が挿入されている。

・『小涅槃經』には、『仏母經』に見られる「釈迦が説法を終えて再び棺に帰った後、摩耶夫人が阿羅漢果を証する」描写が無い。

『仏母經』は、その経題からわかる通り、摩耶夫人を主とした經典である。しかしながら、『小涅槃經』ではこの部分が省かれており、また『大般涅槃經』所説の偈が挿入されている。両者とも「釈迦涅槃」の物語を説いてはいるが、『仏母經』は「摩耶夫人」を、『小涅槃經』は「釈迦涅槃」をより強調している点で、両者には相違が見られる。

この他、美術の面からも『小涅槃經』の成立背景を探ることが出来る。ここで、『仏母經』の経題に注目したい。ここまですべて述べてきたが、実はこの經典の写本の中には『大般涅槃經仏母品』など、『大般涅槃經』に仮託した経題が確認できる。

敦煌莫高窟には、この『仏母經』の内容を描く涅槃図が計四点確認される⁽³⁾。それらは大小乗の『大般涅槃經』や若那跋

陀羅等集『大般涅槃經後分』などに説かれる物語とともに『仏母經』の所説を描いている。そうした涅槃図と、『大般涅槃經』に仮託した経題が個別に存在したとは思われない。つまり、『仏母經』の内容が『大般涅槃經』の一部と見なされていたと考えられる。経典と絵画の先後関係はさておき、『仏母經』を『大般涅槃經』の中に組み込もうとする意識が次第に高まり、そして新たに『小涅槃經』として編集したのではなからうか。

四 結語

以上、『小涅槃經』テキストを紹介し、本經の成立背景について論じてきた。中国の文献資料から確認できるテキストはいずれも一四世紀以降のものであったが、実は奈良・宗祐寺涅槃図左幅賛によって、本經の成立年代が一二世紀末から一三世紀まで遡ることとなった。

また、本經が成立した背景には『仏母經』や涅槃図との関係が想定できる。『小涅槃經』に先行する『仏母經』は、敦煌において涅槃図の題材として用いられてきた。その中で、『仏母經』は『大般涅槃經』の一部と見なされるようになり、涅槃類であることを強調した『小涅槃經』という経題で再編集されたと考えられる。

1 三点のうち、(1)と(2)はすでに西脇常記「『仏母經』小

『小涅槃經』の成立背景(岸田)

論」によって紹介されている(『東アジアの宗教と文化』西脇常記教授退休記念論集編集委員会、二〇〇七、三九―四七頁)。

2 中野玄三「宗祐寺の仏涅槃図について」(『学叢』創刊号、一九七九)。

3 『仏母經』の所説に基づく涅槃図は以下の通り。第一四八窟涅槃変相図、第一五八窟涅槃図、第四四窟涅槃図、第六一窟仏伝図涅槃景(賀世哲主編『敦煌石窟全集七法華經画卷』商務院書館、一九九九、一四八―一七三頁)。

〈参考文献〉

西脇常記「『仏母經』小論」(クリスティアン・ウィツテルン、石立

善編『東アジアの宗教と文化』、西脇常記教授退休記念論集編集

委員会、二〇〇七、一三―一五三頁)

中野玄三「宗祐寺の仏涅槃図について」(『学叢』創刊号、一九七九、

八四―九五頁)

賀世哲主編『敦煌石窟全集七法華經画卷』(商務院書館、一九九九)

(本稿は、平成二十六年本願寺派教学助成財団慶華奨学金の成果の一部である。)

〈キーワード〉 『小涅槃經』、涅槃図、金館出現、『仏母經』

(龍谷大学大学院)